我が家の戦後を振り返る

寒川町支部　柴田　ユキエ（妻）
戦没者　柴田　登
戦没地　シベリヤ

主人「登」を昭和十六年、綾瀬より迎えました。十八年一月に長女雅子、翌年八月に長男が誕生、父、母と共に、にぎやかな家族となりました。

戦争は一段と激しくなり、主人も長男誕生のその年九月に召集され、東京世田谷の部隊に入隊しました。十一月に戦地満州に移動かも知れないと、宮山の金子さんより知らせて頂き、翌日、両親と早川（綾瀬）の兄と私と長女をつれ面会に出発しました。午前中に面会は出来ましたものの、夕刻にはもうどこかに出発するとのこと、品川までの電車に家族ともども同乗させてくれました。

その間のわずかな時間に子供との再会、いろいろな話が出来ました。出発の時間待ちの夕刻まで、話は尽きませんでした。田畑の耕作のことと、子供をたのむということばかりを何度も何度もいわれました。

その大切な長男を二か月後に亡くそうとは、夢にも思いませんでした。秋の穫り入れの時期に

©2011_財団法人神奈川県遺族会

なり、主人の出征やなにやらで私自身が体調を崩し、子供を病気にしてしまい亡くしてしまいました。主人は農業一筋の人でしたので田畑で一丁歩以上の耕作をするそこそこの農家の秋は女手では大変な農作業でした。今思いますと、毎年親戚兄弟の手を借りての農業を主人が帰るまでと何年も続けました。日本は終戦後、食料難が当分続きましたので春と秋の農家の農作業は、どこでも大変でございました。

二十年八月終戦を迎えて、外地の兵隊さんも次々と復員されました。或る方は元気に、或る方は戦死と悲喜こもごもの戦後でした。私の主人はというと一向に消息がつかめず、千葉県の留守部隊の連絡所に何かの手がかりを得ようと毎年、何度も通いました。

ある時は戦友に、又或る時は満州からシベリヤに抑留されたとか、シベリヤの病院から帰国された看護婦さんを尋ねて兄と叔父と夜行列車で長野に、大阪へ、山口へとあらゆる情報を得ようと努力しましたが最後に何処にいったのか生死さえ不明で確実な情報が得られませんでした。

しかし、いろいろな情報を総合すると、どうやらシベリヤに抑留されて戦病死したのではないかと思えました。私はしかし、或る日突然「只今」と云って帰って来るように思えてなりませんでした。五年、六年と消息がつかめぬまゝ時がすぎました。寒川町で未帰還兵の最後の一人となってしまいました。

おかしな話ですが、このままですと永久に未帰還兵という扱いでして、こちら側の態度を明確にしませんと主人の葬儀も出来ません。私は戦死を認めることがどうしても出来ずにいましたし、認めようと思いませんでした。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

しかし、親族会議が開かれました。結論として、長女雅子の成人を待って、昭和三十年頃になり、県に申し出をし、昭和二十二年シベリヤにて戦病死という公報を頂きました。父や母、姉妹たちにも共に随分と苦労を掛けたと思います。

娘の雅子が小さい時から明るく振る舞ってくれたことに救われたと思います。

その後、主人の本葬、雅子の結婚、父の死と心の休まる暇も無く続きました。あの忌まわしい戦争は、私達に大きな犠牲を与え、家族の平和を奪いましたが、考えてみますと日本全国には私と同じような境遇の方が、それぞれ状況こそ多少の違いはあるにせよ大勢居られると思います。

ですから、今日のこの平和は、当時の国民皆さんが、多大な犠牲を払ってかち得た平和である事を忘れず、次世代に語り継がなくてはいけないと思います。

今、平和な我が家も孫達も各々結婚し、曾孫も居て、戦争なんて何時、何処であったのかさえ知りません。年老いてしみじみ思い起こしますと、戦中、戦後があっと言う間の出来事のように感じられる昨今です。

©2011_財団法人神奈川県遺族会